

市町村合併をともに考える シンポジウム2002 in 栄町 (パネルディスカッション全文掲載)

2002.11.23

§コーディネーター紹介§

専修大学法学部教授 小林弘和先生

1951年に埼玉県生まれ。

早稲田大学政経学部政治学科を卒業。

成蹊大学、大東文化大学、東海大学講師を経て、現職に至る。

《栄町における役職》

- ・栄町行政改革推進委員会委員長
- ・栄町補助金等見直し検討委員会委員長



§パネリスト§

行政側：栄町長 大野 眞

議会側：熊谷議員

○議会合併研究会幹事

松島議員

野田議員

○コーディネーター

こんにちは。専修大学の小林です。よろしくお願いいたします。

予定時間が残りございませんので、早速本論に入らせていただいて、お話を展開させていただきたいと思っております。きょうは、もう既にご質問がたくさんこなに来ておまして、全部お答え、最後の質問時間もとってありますけれども、なかなかもう何十枚という形でございましてできませんけれども、ご住所・お名前あるものは責任もってお答えさせていただくということでございますので、このパネルディスカッション1時間ほどいたしまして、また、質問の開始をさせていただく時間をとっておりますので、そのときにはこれからのご発言等でご質問ございましたら、ぜひおいでいただければと思います。よろしくお願いいたします。

早速、きょうの4人のパネリストの方にお話を伺いたいと思っておりますけれども、一番最初に少し自己紹介がてらというふうにはあれですけれども、自己紹介していただくようなあれでなくて、皆さんご活躍をされていることですので、それぞれ合併に関するお考えを1人5分程度ぐらいでお話しいただければと思っております。

議会でこういう開催をするというのも、私も全国いろいろな合併回っておりますけれども、珍しいということですが、その点では議員さんの方からということで、この際、議員さんの方からまずお考えをよろしくお願いいたします。

○熊谷議員

熊谷と申します。よろしくお願いいたします。

早速、じゃあ、私の方から今回の合併についての私の考え方なんですけれども、先ほど、基調講演でお話があったと思うんですけども、要約しますと約700兆円の国の借金を、そのうちの約200兆円を地方自治体が負うんだと、そういうことの一つの手法として市町村合併せよと、そう受けとめているわけですけども、一つは表現変えれば上意下達というか、そういう考え方を私はとっています。しかも、一律といいますか、細かいところまでの踏み込んだ内容とは少し違うと。そういう中で私の認識している範囲では、地方が肩がわりするという形ですね、それと一番問題だなと思っているのは、合併後、地方の財源確保の道が示されていないと、これは非常に困っちゃう話なんですけども、先ほど栄町約76億円の予算の枠の中で、29%が国からのお金で運営されているわけです。そういう中で、今後こういう交付税が、補助金ですね、そういうものがなくなるとすれば、自分たちが何かしらの財源を探していかなきゃならない。そういつたときに、財源確保の権限が示されていると。これはどういうことなのかと、そういう疑問点が出てくる。さらには、特例債認めますよという話ですけども、これは中身はやっぱり地方の借金なんです。だから、借金に借金が重なるんだと、そういう認識でおるわけです。したがって、私の今の認識としては、まず合併ありきとはまだ考えたくない。しかし、17年の3月までには何らかの答えを出さざるを得ない。そういう中で、私たち議員も、あるいは行政も合併についていろいろ考え始めた、検討を始めた。そういう中で、きょうこういう場をひとつセッティングできたわけですけども、今後の形とすれば、まず最終的には議会で決めるんですけども、しかし、その大前提とすれば住民の合意が大前提と。ということであれば、議会も行政も含めて、住民の方々、徹底した本音の判断材料を提供しなければいけないと。そういうことを痛切に感じているわけですけども。そういう、先ほどの基調講演の中でお話があったんですけども、それほど簡単な話ではないわけですね。水面下では。

そういう中で、じゃあ、何を基準にして、基盤として考えていけばいいのかと。そういつたときには、物事すべてというのはまず自分から始まるだろうと、そう考えます。というのは、まず、自分がどうなのかと。何か持ちかけられてきたときに、何かやれと言われたときに、よりどころは自分であろうと。ということは、形変えれば栄町はどういう立場でどういう考え方をしていくんだと、まず、町はどうなんだと。そういつたときに、まずこれからやらなければいけないのは、栄町自体の自己の実力評価ですね、これを徹底してやると。ここをこうすれば合併はする必要ないんだと。その方策は何だと。あるいは、検討した結果、ここだけはどうしてもないんだと、だから合併せざるを得ないと。合併ありきじゃなくてですね、合併せざるを得ないんだと。そうすると、合併先はということに、お嫁さん選びどうするかという話になります。そういつたときに、今のところは二つのパターンが示されていますけれども、これは限定されたものではないと考えています。私は。

そういう中で、さらにはいろいろ目先の状況というのは、今の姿ですけども、後は将来を見据えた5年、10年先の社会情勢とか国際情勢を見据えた形で慎重に全体が一緒になって検討していかなきゃいけないと思います。今のところ、そういう状況であります。